

中学生へのビジネス支援「14歳のハローワーク」について

岡山理恵

舞鶴市立西図書館

1. はじめに

ビジネス支援サービス未実施の図書館からの参加ということで、受講には不安ばかりが先立った。しかし、利用が落ち込み、切羽詰まった当館の運営状況下で「とにかくどんな情報も吸収したい、一から勉強したい。」と藁にもすがる思いで参加することに踏み切った。始まってみるとオンデマンド授業は、目から鱗の情報ばかり、初めて知る実践事例の数々、加えて先生方の熱い言葉のひとつひとつが心に突き刺さり、この年齢になって今更ながら学ぶ感動を覚えた。その中でも多くの先生が繰り返しおっしゃった「行動することが大切」その教えに答えるためにも、とにかく走り出してみたい。

2. 舞鶴市の現状

舞鶴市は人口8万人余り、京都府北部、日本海に面した山あり海あり自然に恵まれたまちである。京都市内からは100km、特急で1時間半かかるが、「ITを活用した心が通う便利で豊かな田舎暮らし」ができる住みやすさを市ではPRしている。直面している問題としては、多くの市と同じく少子高齢化による人口減少がある。若者の多くは進学を機に舞鶴を離れてしまう。そこで、またふるさとへ戻ってきてほしいとUターンや移住などを進めており、『第7次舞鶴市総合計画』¹第1章にも示し、担当課を新設するなど力を入れて取り組んでいる。歴史的には昭和18年(1943)に東舞鶴と西舞鶴が合併してできた複眼都市と呼ばれる特殊な事情を抱えており、公共施設の統合・整理を進める上で現在でも障壁となっている。

3. 舞鶴市立図書館の現状

舞鶴市の図書館は、平成元年(1989)に東図書館、平成2年(1990)に西図書館が設置され、両館が同格で同規模の施設である。他に3つの公民館図書室が分館として設置されている。オープン以来、市民の生涯学習の場として親しまれて来たが、およそ30年が経過し、躯体、設備ともに老朽化が進んでいる。特に空調、照明の劣化は酷く修理も難しい状態にあり、更新による長寿命化もしくは、東西図書館を統合した中央図書館の新設も選択肢として浮上している。平成30年(2018)には舞鶴市図書館協議会が設置され、各方面の専門家や市民の意見を取り入れ、舞鶴市の図書館としての在り方²を見つめ直している。

4. 舞鶴市立図書館の課題

複眼都市という背景もあり東西の図書館は、総括する課長を除いては、司書職員2名と

嘱託職員等あわせて6名ずつで配置職員数も同じ、予算も同じ、蔵書構成もほぼ同じ、実施事業もほぼ同じという具合に市内に同等の図書館が2つ存在している。「もったいない、無駄だ。」という声がある一方、「東西それぞれに同等のものが必要。」という根強い考え方も残っている。平成28年(2016)以降は予算が大幅に減少したこともあり、児童書以外は東西図書館で同じ資料を購入しないように選書しているが、それぞれの方向性の転換や特色を打ち出すというものではない。

来館者の多くは、小説や趣味のための図書を借りる子どもと高齢者世代、子どもが読む本を借りる子育て世代が占めている。働き世代と10代の若者の利用が少ないことが問題視されており、このような状況を脱却するためにも課題解決型図書館として、ビジネスや生活の悩みに頼りになる存在として転換するべく岐路に立たされている。

5. 事業提案について

これまでビジネス支援サービスは未実施であったが、図書館の生き残りをかけて今年度は「ビジネス支援サービス元年」に位置付けたい。ビジネス関連資料を収集する、展示スペースを設ける、お悩み相談の看板を掲げるという3つは、今年度の目標としており、講習後に実施。本レポートでは、来年度以降に実施を目指した事業を提案したい。

(1) 事業の背景

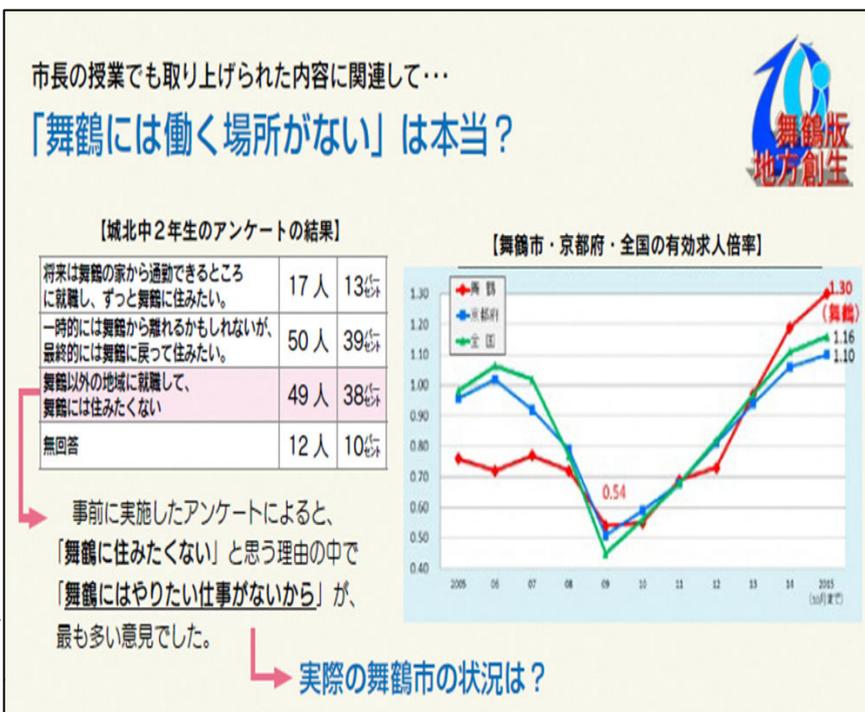
本市は少子高齢化の人口減少に直面しており、若い働き手の確保が急務である。その一方で資料①のような調査結果がある。

資料①『広報まいづる 2016.1』より³

舞鶴市には大学がなく、多くの子どもたちは、進学を機に舞鶴を離れてしまう。

しかし、アンケート結果のようにふるさと舞鶴に住み続けたいと考える中学生も多い。また、舞鶴市の求人状況や地元企業についての情報を知らないことから、舞鶴で住みたいという夢をあきらめてしまう大変もったいない状況にある。

そこで、舞鶴市長は中学生に直接本市の状況や魅力を語りかける「市長講話」⁴を実施。市内7中学校に出向き、2年生を対象に地元の産業



基盤や、京都府北部5市2町を連携都市圏としたマニフェスト⁵など多岐にわたって説いて

いる。中学生も真剣に受け止め、舞鶴中学生まちづくり議会⁶でも舞鶴の就職についての質問が増えてきている。市長講話の結果、「舞鶴市の状況は知ることができたけれど、夢をかなえるには実際どうすればいいの」という疑問や「もっと仕事について知りたい」という欲求が中学生の中に芽生えている。このようなニーズと課題を解決するために本事業を提案する。

(2) 事業内容

以下のように中学生にビジネス支援を計画、実施。市長講話、職場体験学習のカリキュラムが組み込まれている中学2年生およそ800人を対象とする。

① 「14歳のハローワーク」と題したブックトークを実施

司書が中学校へ出向き、舞鶴の事業所情報、希望する職業に就くための進学情報、資格、起業、働き方など幅広いビジネス情報をブックトーク形式で紹介する。クラス毎に実施し、そのまま図書は貸し出す。市役所の産業創造雇用促進課や移住・定住促進課とも連携し、移住者の体験談等も映像で示す。

② 図書館内で中学生以上を対象とした一般向けのビジネス支援コーナーの設置

ブックトークで紹介した本をはじめビジネス支援に関する情報を集めたコーナーを設ける。伝記やレポートなど幅広い資料も配架する。事業所のパンフレットや学校案内なども収集する。調べものができる端末も配備し、資格が取れる学校や事業所のホームページなどにアクセスできる環境を整える。

③ 中学校への貸出文庫

ビジネス関係資料、郷土資料、職場体験学習に使用できる資料など様々なジャンルの図書100冊をセットにして、市内全中学校に配達、適宜交換する。

④ イベントの企画開催

中学生が参加できるアクティブラーニング型のイベントを企画する。

(例1) まちゼミについて学び、実際に中学生がまちゼミに参加し盛り上げに一役買う。

(例2) 伝統産業の担い手をレポートし、市のホームページや各種SNSで発信する。

(例3) 店舗が減っている商店街に人を集めるまち遊び企画⁷を考える。

体験しながら学べる機会と情報を提供できる企画にする。

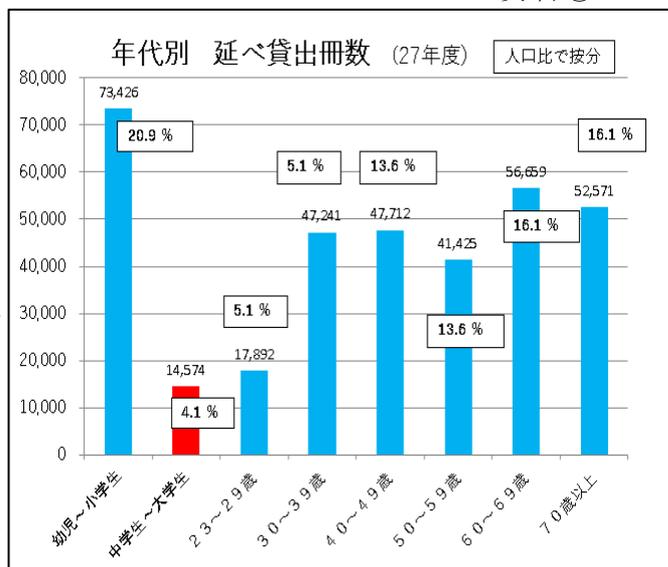
この4つを柱として進める。ブックトークは、全小学校に出向き、25年以上実施しているノウハウが活かせる強みがある。ビジネス支援コーナー設置は、中学生が理解できる資料を選書することで誰にでも易しくわかりやすい情報提供ができる。貸出文庫は、職場体験学習の導入、フォローアップ資料として先生への教材提供にもなる(これもビジネス支援の1つ)。イベントについては、中学校の図書クラブや生徒会と調整し、図書館と共催で企画、実施する。

(3) 事業による効果と展開

①地元舞鶴での就職の夢を叶える人を増やすことで人口減少、人口流出の抑制が期待できる。効果を出すまでには、中学時代だけでなく高校生、大学生など若い世代への支援を継続して行うことが重要である。

資料②

②中学生に支援することで先生や家族だけでなく、図書館も相談できる選択肢となり、図書館利用の促進につながることも期待できる。資料②の通り、舞鶴市の図書館は、中学生から22歳（グラフでは大学生と表示している）の利用が極端に少なく問題視されている。中学生にアプローチすることで「図書館は頼れる、身近に相談できる場所」というイメージを持ってもらい、高校生や大人になり働き世代になっても課題解決に図書館を役立ててもらいたい。



③この事業は、舞鶴での就職が真の目的ではない。中学生が希望の職業や働き方について考え、将来の夢を持つことを応援するものである。地元を離れ就職する場合も支援し、情報提供する。先々で転職をしたり、起業をしたり、Uターン・Jターン等を考えたときに舞鶴を選択肢にする布石となることを期待したい。

④イベントは、計画段階から中学校や市役所の関係各課や商工会などとも連携し、中学生の学習という範疇にとどまらず、まちづくりの視点からも効果的な事業に発展させる。

(4) 事業の実施にあたって

ブックトークや貸出文庫、コーナー設置には、新鮮な情報提供のためにも資料費が必要となる。中学生に映像やインターネット情報を提示するにはパソコン、プロジェクターなどの備品や環境整備にも経費がかかる。ましてイベント企画となると費用は膨大になる可能性もある。十分な資料提供、見せ方という点では経費は必須である。しかし、予算がないからと立ち止まってはいただけない、悩みを持つ中学生は成長していく、図書館が足踏みしている間にも舞鶴で住みたい思いを断念する生徒が増えていってしまう。今ある図書館の蔵書を靴に詰めて、すぐにでも中学校に出かけることから始めたいと思う。

中学生を対象にしたことは、高校進学から他市へ出てしまうことも多い舞鶴市ならではの事情がある。情報を得ることでふるさと舞鶴について愛着を持ってもらいたい願いもある。ハローワークと事業名に付けるからには、一人一人の悩みに丁寧に向き合う覚悟を持って臨みたい。

6. おわりに

このような提案を考察できたのは、第20回ビジネス・ライブラリアン講習会受講のお陰であり、心から感謝している。常世田理事長の「こんなものだと思っていました。と思考を停止してはダメ、考えなくてはいけない。」との言葉の通り、「どうせこんなものなんだ。」と諦めてしまわず、「それなら、どうしたらいいのか。」考え続ける司書でありたい。そのような積極的な思いに至ったのは、講師陣の先生方をはじめ、サポートして下さった事務局の皆様、共に学んだ受講生の皆様のお陰である。特に同じ班の方には提案に対して的確なアドバイスや「ぜひ自分の図書館でもやってみたい。」と励ましをいただき、助けられた。受講に協力いただいた職場の方々など、力になってくださったすべての皆様に感謝を申し上げて結びとする。お世話になりありがとうございました。

¹舞鶴市ホームページ <https://www.city.maizuru.kyoto.jp/shisei/0000005055.html> にて公開。

²第1期舞鶴市立図書館協議会から「意見書」を受理。

<https://www.city.maizuru.kyoto.jp/kyouiku/0000006070.html> 舞鶴市ホームページにて公開。

³『広報まいづる 2016年1月号』p13で「市長講話」について紹介。近年は事業名を「ふるさと講義」としている。<https://www.city.maizuru.kyoto.jp/shisei/cmsfiles/contents/0000000/306/280101.pdf> 舞鶴市ホームページにて公開。

⁴ 同上。

⁵ マニフェストを含む京都府北部地域連携都市圏ビジョン

<https://www.city.maizuru.kyoto.jp/shisei/cmsfiles/contents/0000003/3312/renkeibizyon.pdf> 舞鶴市ホームページにて公開。

⁶中学生が議員となって市長や教育長に質問する取り組み

<https://www.city.maizuru.kyoto.jp/kyouiku/0000003569.html> 舞鶴市ホームページにて公開。昨年は「舞鶴ミレーティング」という名称で実施。

⁷ 先進事例として広島産業振興機構が実施した中学生へのイベント「本通りをかけめぐる」中学生対象のプロジェクト型学習セミナー

「まちなかにあそび場をつくる」をテーマにしたアクティブラーニング。ビジネス・ライブラリアン講習会講師土井しのぶ氏から参考事例として紹介いただいた。<https://www.hiwave.or.jp/wp-content/uploads/2018/08/kakemeguru.pdf>

広島市立中央図書館の高校生向けビジネスサービスも先進事例として参考にした。

<http://www.library.city.hiroshima.jp/search/business/index.html>